

## 風評被害に泣いた島 (ごみの豊島を見る)

昨日(10月5日)は午後から雨が降り本降りになる中、枚方の「すしー」で結婚45周年(サファイア婚式)の記念日を二人で祝った。人生のさざ波は誰でもあることで不思議なことではないが、時にしげに遭遇して荒波をかぶる危うい人生行路(結婚生活)をさ迷ったりもしたが、今日は雨も上がり穏やかな日和になった。

金木犀の季節も盛りを過ぎ、兵庫県西部を流れる千種川に早や冬鳥が飛来しており、千種川を渡るとその向こうは岡山県日生である。

鷲羽山の展望ホテルで瀬戸内海を望みながら昼食をいただく。瀬戸大橋が坂出に延び、橋の向こうは工場地帯なのか煙突から白い煙がもくもくと噴き上げている。

讃岐富士を抱きかかえるように霧がかかった四国山脈が横たわり、はるか左の方角に尖がって見える山は四国第2の高峰剣山であろうか。

海がキラキラと輝き、貨物船やタンカーが白い航跡を残してゆっくりと内海を進んでいる。海は穏やかだが、鷲羽山は松枯れの被害を受け荒れている。

宇野港に着くと大きなフェリーが四国に向け出港して行くところだった。何の旅行だったのか思い出せないが、高松から連絡船に乗り、宇野港に着くと先を競って国鉄宇野駅に走ったことが思い出される。

高松・宇野を結ぶフェリーに乗り豊島<sup>てしま</sup>に向かう。宇野港の岩稜に建てられた「玉野競輪」の大きな看板が目を引き、玉野市街の高台の大きな邸がひと際目立つ。豊島問題に取り組むガイドの市村さんが、「塩田や造船で蓄財した富豪の邸」と教えてくれる。

船が進む正面に見える島は犬島で、大坂城築城の際切り出された残念石があり、小豆島近辺の基盤を形成する花崗岩は8千万年前のマグマが凝結したもので、古くから良質のものとして知られ、瀬戸内には大坂城の石垣の石を切り出した島がたくさんあるという。

白砂青松と多島美の瀬戸内海は、昭和9(1934)年に我が国最初の国立公園に指定された世界に比類のない美しい景観で、氷河時代は海面が200mも低く陸続きで、湖が点在する草原にマナウン象が棲み、旧石器時代から人が住んでいた。

瀬戸内の沿岸は古代から製塩が盛んで、燃料の木材が伐採されて禿山となり、岩が崩れて砂が流出し、やせ地に強い松が生えて白砂青松の島になったという。

瀬戸内海東部に位置し、アートの島として若者に人気があるという直島の頂きに赤・白ツートンカラーの大きな煙突が建っており、三菱マテリアル直島製錬所といい、大正6年

に三菱鉱業が銅の製錬所を建てたのが始まりで、煙の吐き出す煙害で島が禿げている。

周辺のいくつかの島も禿山となり、戦後まもなくから植林が続けられているが、松が大きく育ち地中に根を張り出すと地中に浸みこんだ硫酸の酸化により枯れるといい、煙害はなくなつたというもの松は今なお被害を受けていると言う。

黒ずんで無残な姿をさらした島が目飛び込んでくる。大小27の島々で構成される直島諸島の北端に位置する井島で、島の北部は岡山県玉野市、南部は香川県直島町に分かれた県境のある珍しい島で、人口は103人だが全て岡山県に属しており、岡山県側では石島<sup>いしま</sup>と呼び、平成23(2011)年の山火事で73時間燃え続け、山林237haの9割以上が燃えたといい、つい2か月前にテレビで報道されていたことが思い出された。いよいよ問題の豊島<sup>てしま</sup>が見えて来た。

豊島は、瀬戸内海国立公園の小豆島と宇野港の中間にあり、小豆島の西方3.7kmに位置し、面積は14.6km<sup>2</sup>、周囲19.8kmで、香川県では小豆島に次いで大きく、小豆郡土庄に属している。

島の中央に壇山(339m)があり、樹齡200年前後のスダジイが群生し、麓にはクヌギ林が広がっており、河川、溜池、水路など水面面積は他の離島の3倍もあり、豊富な湧き水が棚田を潤し、島では珍しく稲作が行なわれ、瀬戸内の潤沢な漁場に恵まれて漁業も盛んで名の通り豊かな島であったと言う。

島の南部にある貝塚遺跡は、9000年も前のものといい、西日本で最も古い貝塚で、島の西部には縄文末期から弥生時代にかけての遺跡もあった。

豊島では、平安時代末期から1000年にわたって採石が行なわれ、豊島石(角礫凝灰岩の一種)と呼ばれ、苔が付き易く日本庭園にマッチした石材で、桂離宮をはじめとする石灯籠などに使われ、耐火性もあり火鉢やかまどに用いられてきた。

家浦港に上陸し、再び近畿観光バスで島の西部に進んで行く。棚田を見やりながら市村さんのガイドに耳を傾ける。

敗戦の時の人口は3000人だったが、現在は1000人の島といい、豊島には自給して余りある農産物があり、米は島外に移出するほどで、今でも耕地に占める水田の割合は瀬戸内海の島の中で1、2を争い、農家の多くは稲作とともに乳牛を飼育し、かつては「ミルクの島」とも呼ばれ、戦後、賀川豊彦により乳児院ができたのも牛乳が豊富だったからで、島民の生活は豊かで子どもたちは高い教育を受けて島を出ていき、高い地位を得た人が多く島に帰って来ないので過疎が進み、産業は衰えるばかりと言う。

ガイドの市村さんは、海の生物の定点観察をしている研究者で、豊島には2万年前の人の住居跡やサヌカイトの矢じり等の石器が出土する遺跡の島だったが、産廃業者によ

って遺跡が破壊されてしまい、研究が出来なくなったと顔をくもらす。

豊島は豊かな島で、米は大阪に売りに行ったほどだが、「ごみの島」の風評被害が出て、小豆島のブランド名で売られるようになり、魚場は「世界で最高」と言われていたが獲れなくなったと悔やむ。

未来の里にオリーブの苗が植えられている。小豆島のお土産屋で売っているオリーブの半分以上は豊島で作られているといい、東洋でも最大の東洋オリーブ園があり、昔からオリーブの島だった。

豊島中学校周辺の用水路には、今もドジョウやメダカが棲んでおり、メダカはメバルの餌になるので豊島では大事にされて来たが、マスコミ報道で知られメダカを取りに来る人がいると嘆く。

豊島には、悪質な産廃処理業者により有害産業廃棄物が約51万トンも持ち込まれ、不法投棄されたと見られていたが、今では90万トンとも言われ、ほとんどが関西から運び込まれたもので、初めは10トン車で運び込んでいたが、最盛期には飾磨港からフェリーに積み込んで運ぶようになった等の話があった。

バスは、西へ西へと進み道がだんだん狭くなる。前方から来る大型車と行き違い、長い間待たされる。山の奥に進んで行くにしたがい道は険しくバスが通るのがやっとで、10年前まで道の両側にあった畑は原野に戻り、道に張り出した木が大型バスに擦れ、跳ね返った木の枝でバスを叩く音がバンバンと響く。

木陰に何軒かの廃屋があるのが見え、やがて島の西のゆずの浜(ゆうの浜)が開け、直島で処理されることになった産業廃棄物を積み出す棧橋が見え、突如、小高い丘の上に太陽をイメージしたという赤い建物が見えてきた。

豊島ごみ処理関連施設に到着し、会議室に通され、豊島問題の概要をまとめたビデオを視聴する。

「消費は美德」という言葉が使われたのは、昭和30年代以降の高度成長時代のことで、私たち日本人は、戦後の経済発展の中で、いつの間にか大量に消費して大量に捨てるのが当たり前、豊かさの証拠でもあるかのように考え始めました。

豊島問題は、そうした社会がもたらした戦後最大級の不法投棄事件と言われています。そして、この問題は、あまり重要視されてこなかった廃棄物の問題を、一気に我が国最優先の環境問題にクローズアップさせ、廃棄物政策の見直しを行う引き金となった問題でもあります。

豊島に不法投棄された廃棄物の処理は、国の公害等調整委員会の調停に基づき、香川県が実施することになりましたが、この問題は、国家レベルの課題である『持続可能な

社会の構築』、特に資源循環型社会形成に向けた取り組みとして、すべての人に、企業・消費者・行政関係者といったそれぞれの立場で考えていただきたいと思いますとのナレーションが流れ、ことの重大性・重要性をひしひしと感じる。

施設のガイドと市村さんから豊島問題の経緯について話があり、昭和50(1975)年、豊島総合観光開発株が産廃処理業について県に許可を申し出たことが発端で、博打の肩代わりに取り上げた土地を、「金になる」という理由で「産廃でミミズの養殖をやるから」というウソをつき、膨大な量の産廃を島に持ち込み始めた。

この業者は当時から暴力団まがいの言動と、島の山砂を切り崩す環境破壊で島民の反発をかっており、このままでは自然破壊、漁業被害が大きくなると懸念した島民が一丸となって、「産廃持ち込み反対」の署名を集め知事に提出した。

昭和53(1978)年、島民の反対にもかかわらず県は、汚泥などをミミズでリサイクルし土壌改良剤を作る事業を許可、これは産廃ではないというのが県の判断で、当時の香川県知事は革新系であったが、説明会で「皆んなが嫌うごみを処理してくれ、安全なものだけを持ち込むもので、反対するのは住民のエゴだ」と非難したという。

島民は、香川県庁前でデモをしたり必死で抵抗したが、県はやくざよりたちが悪いという業者とトラブルを起こしたりややこしくなることを避けて常に業者側に立ち、県の職員は立ち入り調査もせず、喫茶店で業者と雑談したり島で魚釣りをして帰ったと言う。

豊島のとてつもない環境汚染を県がそのまま放置したため、業者はますますつけあがり、ミミズなどという看板はかなぐり捨て、県に脅しをかけて金属くず商の許可を取得し、トヨタ、日産、ホンダなど自動車メーカーの自動車の破砕くずなど産業廃棄物を一手に引き受けて持ち込み、野焼きや不法投棄を16年間続けた。

汚泥、重金属、正体不明のドラム缶、堆肥など何でもござれの産廃を、ドカドカと船で運んでは積み上げ、積まれた産廃の量は60万トン以上と推測され、野焼きの煙のせいで喘息に苦しむ住民が急増し、子どもたちの被害も深刻になった。



香川県警は、住民の告発を退けていたが、豊島総合観光開発株が極端に安い値段で産業廃棄物を引き受けていたため関西の同業者が追跡したところ、姫路の飾磨港から積

み出され不法投棄していることが判明し、神戸水上警察が追尾して海上の県境で取り押さえ摘発されたもので、県警同士の争いでもあった。

兵庫県警が事業所を強制捜査したことから、住民の訴えを長年無視し続けた香川県は初めて動き、処理業の許可取り消しと廃棄物の撤去を命令することになった。

平成3(1991)年に兵庫県警が経営者を逮捕し、神戸地裁姫路支部は有罪判決を下し、罰金50万円・懲役10年(執行猶予5年)を科すことになったが、香川県が処理業者・経営者を告発したのは平成6(1994)年になってからであった。

住民が裁判を起こすには、被害を立証するボーリングが必要で、調査に1億円もかかって負担できないため裁判で勝つ展望がなく、平成5(1993)年、公害調停を申請し、雨の日も晴れの日も県庁前に立ち続けて抗議したり、県内の市町村を行脚して県民の理解を高める運動を展開してきた。

住民運動は紆余曲折を経ながらも続けられ、ついに平成8(1996)年、高松地裁で豊島観光開発に対して慰謝料の支払いと廃棄物の撤去を命じる判決が出され、事業者側が住民に解決金を支払うこと、香川県が住民に謝罪し廃棄物を撤去・処理すること等を定めた調停が出された。

これを受け、平成12(2000)年に県と最終合意し、不法投棄された産業廃棄物は香川県直島の三菱マテリアル製錬所に運んで焼却、熔融処理することになり、県は住民に謝罪したが、海苔やハマチの養殖、養鶏など住民の大きな被害に対して業者から賠償金は1円も支払われなかった。

平成15(2003)年、豊島に中間処理及び保管・梱包施設、直島に特殊前処理施設が完成し、不法投棄現場は一般市民の立入りが禁止され、産廃の水分を抜くため重しとして分厚い盛土をし、雨水を通さないよう表面にシートをかぶせ、汚水が海に流入しないよ



う海岸線に沿って最深16mの遮水壁が設けられた。

地下水・浸出水は、KUBOTA製高度排水処理施設で日量65トンを浄化処理し、2600㎡の水槽に貯め、鯉を泳がせて生息できることを確認して海に流されている。

今でも地面を掘り返せば

異臭を放つゴミが顔を出すといひ、防毒マスクを着けて現場に入り、廃棄物を重機で掘削して処理施設に搬入し、大きな岩石、コンクリート塊、金属、タイヤ、シート、ホースなど分別し、切断、破碎などを行ってコンテナに詰め、専用栈橋から専用輸送船(太陽)で直島に輸送されるが、雨水が多く処理に手間取って作業が遅れているという。

「豊島こころの資料館」を見学する。投棄現場の一角に建てられ業者が見張を立てて他人を入れなかったプレハブ様式の管理事務所で、反対運動の象徴として彼らから取り上げたといひ、今は、環境啓発活動の拠点になっている。

仕切られたいくつかの部屋に、島民が何10年にもわたって産廃公害に取り組んだ記録や、埋立地から出てきた特異な廃棄物が所狭しと並べたり張り出され、なかでも圧巻は埋立地の断面をはぎ取って貼り付けたボードの展示で、野焼きしては土をかぶせていた様子が分かり、市村さんは「現代の貝塚」と言う。

平成2(1990)年11月17日発行の読売新聞が展示されている。「瀬戸の島 産廃不法投棄」と号外並みの大きな活字がおどり、たくさんのドラム缶が転がっている写真や野焼きの煙が流れる写真が掲載されているが、兵庫県警が摘発に乗り出すまで新聞報道は影を潜め、「煙が流れる」との住民の苦情も多く、外国船から「島が燃えている」との通報もあったが、地方紙さえ報道しなかったという。



不法投棄された現場は、表面でも34~5、地中は200度くらいあり、常に燃えている状態で臭いやガスが充満し、野焼きでダイオキシンが発生してセイタカアワダチソウが5~60cmで成長が止まり葉が5mmくらい膨らんでいたという。

汚水が海に流れ出てアサリが獲れなくなり、生き物の数が極端に減り、豊島では「海の米」と言われたニシン科のママカリが姿を消し食べられなくなった。

豊島を元の島に戻すために、産廃は国の産廃特措法に基づき、平成25(2013)年までの10年の期限付きで処理されることになり、今年でちょうど5

年が過ぎたが、今だ40%しか運び出されておらず、10年過ぎてもまだ積み残しが出る恐れがあり、国の補助金が切れると予算は福島に流れる。香川県も財政難なのでどうなることかと市村さんは顔を曇らせ、ここにも福島原発問題が影を落としている。

瀬戸内の小さな島を覆いつくすほどの不法投棄がしてあるのではと想像していたが、現場は7haで思ったほど広くはなかった。しかし、野焼きする以前は10倍のごみがあり、深い所は18mも埋まっているといい、下に掘り下げていくほど圧縮されていて量が増えていき、最初に県が捨てるなど言っていたらこのようなことにはならなかったのにと市村さんは悔やむ。

廃棄物の処理が進むにつれ、埋立地に接する北海岸に、豊島再生のシンボルと言われ魚の産卵場所となるアマモが甦り、カニが10種類にも増え、サクラガイや岩礁に固着する貝で一度食べたら病みつきになると言うカメノテも見られるようになったという。

全国に、産業廃棄物が捨てられたゴミの山はいくつもあり、その処理に地方自治体は困惑しているのだが、豊島はラッキーな島だった。マスコミに取り上げられ、中坊公平という力のある優秀な弁護士がつき、全国規模の運動に発展し勝利することが出来たが、すべての廃棄物の処理が終わり元の豊島になるまで戦いは終わらないと言う。

業者はぼろ儲けし、今なら1億円もするのにわずか50万円の罰金で済まし、その尻拭いに600億円もの莫大な処理費用(国が6割負担)が使われ、国民の税金で後始末しなければならないとは何と不合理なことか。

会社が所有する土地とはいえ、好き放題に使っていいものでもなく、全国から集めた産業廃棄物で緑豊かな島を汚し、自然を破壊し住民の生活を壊してしまった。

豊島を訪れて不法投棄の現場を見、「ごみを出さない、捨てさせない」社会を作るため企業も個人も意識を変えなければ、後になって莫大な付けが回って来ることを教えられた。

特殊前処理施設を見学するため直島に渡る。直島は高松市の北13km、岡山県玉島市の南13kmにあり、ちょうど中間にある島で船の便は玉島に出る方が近くて便利と言う。

海の家「つつじ荘」の風変わりなパオの村で宿泊することになり、宴会では酔いも手伝って石橋さんの巧妙なマジックに目くらまされ、今年は森井さんの落語もあって賑わい、パオは初めての体験で思い出になったが、トイレも風呂も外になっており、暗闇の中でトイレをしなければならず、宿泊代が少し高いのではないかと思ったが、渚に寄せる波は規則正しく穏やかで、音曲を聴くようで深い眠りに誘われた。

エコアイランド直島の朝は、潮騒の音が微風に流れ、空は快晴で心地よく、潮の香りにいざなわれ積浦港まで散策したが、海の家つつじ荘近くに「おやじの海」発祥の地の立



派な石柱が立ち、由来が書かれた碑に「昭和52年、北海道でヒットして全国に広まり、300万枚の大ヒットになった。三菱マテリアル直島製錬所で働く二人の男によって広まった演歌で、直島出身の佐藤達雄が作詞作曲し、秋田県出身の村木賢吉が唄った」とある。

ボタンを押すと音曲が流れるようになっていたが、音量が高く早朝だったのですぐに消したが、どこの海の男にも共通する歌で直島がイメージできる歌ではなかった。

お昼は、ベネッセハウスのテラスレストランでフランス料理を頂くことになり、午前中は自由時間で、各自、ベネッセハウスミュージアムに出かけたりビーチ周辺を見て歩くなどして時間を過ごした。

私も、ベネッセハウスミュージアムに行くつもりで出かけたが、ベネッセハウスミュージアム専用棧橋の上の高台に野外アートの展示があり、瀬戸内の島々が眺められる展望もあり、『瀬戸の花嫁』を思いつ、しばしロケーションを楽しんだ後、海辺の古い棧橋にある前衛芸術家草間彌生の巨大な南瓜のオブジェを觀賞したり、琴弾地海岸を散策した。

若山牧水の「ことひきの濱の松風静けしと 聞けば沖辺を雨過ぐるなり」の歌碑があり、テラスレストランの前の海辺には、砂地にめり込んだのか子どもがやっつくぐらいのほど背が低いアンバランスな鳥居が建ち、傍にちぐはぐな感じで背の高いお地蔵様が海を眺めてござり、内海で一艘の漁船があちらに行ったりこちらに來たりして舟引網漁をやっている。



午後は、三菱マテリアル直島製錬所を訪れた。製錬所は直島の北部にあり、銅を製錬する技術を活かして豊島廃棄物中間処理施設から輸送されてくる産廃を処理し、金属などの資源として再生する事業を行うことになり、広大な構内の最奥に建設された香川県直島環境センター(豊島産業廃棄物等中間処理施設)で、直島町内から出る生活ゴミを含めて溶融炉で溶融し、コンクリートの骨材などに使用されるスラグと飛灰を生成し、飛灰は溶融飛灰再資源化施設に移して他の自動車や家電のシュレッダーダスト等と共に溶融処理され、金、銀など有価金属が取り出される。

豊島から1日に2便(週5日)、内容物不明のドラム缶をはじめ豊島で仕分けられた産廃約300トンが、養殖場に配慮して波を立てないよう底が平らになった専用運搬船で運び込まれており、日通に支払われる輸送費だけでも30億円もかかっていると言う。



運び込まれた産廃はさらに 3cm 以下に裁断され、日量 100 トンの処理能力を持つ 2 基の回転式表面溶融炉で、1 時間に 1 回という超ゆるやかなスピードで回転しながら溶融が行なわれ、1300 の高温で焼却されているのでダイオキシン類は分解され、55% がスラグ、5% が飛灰で残りは CO<sub>2</sub> や水分という。

スラグは路盤材などの原料として 600 円/トンで売却されているが、処理経費は 3400 円/トンもかかって「採算は合わない」とのことだったが、金や銀の抽出量はどれほどなのか聞きそびれた。

いずれにしろ溶融などのランニングコストが約 280 億円(28 億/年×10 年)もかかっており、産業界が生み出した産廃が再び金のシャチホコとなって産業界に戻ってくる仕組みが「エコアイランドなおしまプラン」と称するプロジェクトであり、結局産業界が潤う仕組みになっているように思われてならない。

「産廃処理が業になる」と言えば語弊があるかも知れないが、雇用の促進も出来るのに豊島の人々は「他所でしてほしい」と言ったそうだが、その真相は、国のエコタウン事業が終了しても、折角造った施設だからと他の自治体の生活ごみの処理を押し付けられ、いつまでもごみに悩まされ続けるのではないかと懸念したからではなかろうか。

平成 25 年 1 月 14 日